伊勢物語五篇

五

和装本
口9
366
10

門二
編566
巻10

教訓孝行忠義好人録巻之五

目録

森村義之源左衛門事
森村義之仁右衛門事
大平村九郎兵衛事
麻生村義之組頭市郎左衛門事
笹田村徳兵衛親兵の友
平川村義之治兵衛
儀右村義之武助夫婦

河之内村源八妻婦　孝心和順
城下市中孝子　橋屋忠義
城下法志町孝婦　えん
城下町孝子山伏　寺院光明院兄弟
機織屋檜兵衛弟　御嬢英媛　以上

補

城下人　法兵衛妻　すき
上灘漁師長左衛門

教訓
続本　忠孝好人録巻之五

森村孝子源吉郎

山源吉郎い利左衛門とつゝ百姓のもと今年十又九
ゞ又ツ乃年母み抑くゝ年ゝ七ゝ年
と素いひ〳〵と農業もちゝで銀羅ゝ子ゝ拾ゝ
ひ源吉郎今より二三年前ゝ十二三のゝより耕耘
のゝゝゝ力を盡しさのゝ一家の助成をゝひゝゝゝ
てゝゝを考ひゝえゝゝ家中一家の貧民ゝれい恵
人乃田をのゝ作ゝ年月を送り数年ゝ年ゝ
も働ゝてゝきなれば奴ゝゝきづひくゝ

すぢをとり拾ひて大人は先ずちうて至い于茅屋い家
編蓋屋播穀剝麻又の紀居に心まをを労ゝてき麻
世じ結ゝん却て大方るる石巻なれがとりくいらそび
獻ゝてゝん所なぐさちびとつひをゝへるれいてをそれ
へさりるぐゝ世ゝ也ゝ苦ゝにいね作ゝびひま御きづひ下
さゝまじくゝるゝへ故藏方るる人下民の俵渡よかせびに
拾ひたく奥名色ゝと世源を即今年の月又日乃下
人をを人へまうけく田畑又食徐ゝ元宝ゝ人なをを
又年貢世ゝ滞ゝ方く絶ゝ家ゝ御ゝ恵ゝ調ひ
ゝりゝく年ゝ彩ゝ家ゝ麻又への巻彩ゝひ

入ふく薪水をとりそびを尽し租税美と云ぶる功業と
望〻石塔をたてまいく儀を結り感称のひぬ

同村孝子仁左衛門

此者親を孝助こひく居中〻き儀十二三歩ばかりの
貧民なるが仁左衛門初る時より又母をつくくま
めやかりしに十八九の比又母離去を後母一人をたく人
て孫親切なりしとす石姓の業を勤め縄なひを
多く績くよりとせり三十八九の年母を迎そ
のち妻をむか娘一人もちたく十二歳になりしを
かく衛まく〻小民なるが又母にまつくそ後なき

貧加るやはで餘儲出来く今い田畑三反程所あり
相ならが人を借りて日家同三人の暮しなれば有り
ぬしを田地の年貢も良此後なるの餘りにくば親の
祠堂を造て上結りぬべ〻とひるとうや仁左衛門が如き
も孝心あり安比只今年五
十九歳にあり此又母親存命より孝〻て後と暮時
無〻ぶを上感〻思召貧家業を〻ば多物の夜寝
なる代稼〻て儀を編りぬ

大平村九郎兵衛

此者の親を六兵衛とつり先此六兵衛実直なる良民

なり歩にて上を乗んぐ傾馬人足などの給ある所なる
ほど小支の者へ何人なりとも家の者法に乗うまと
傾くらべる公用足にもみなべくい脚に牛をつひね
ひ家業牛ひきにて乗ぐ[illegible]そとの御用を勤
しむるなり[illegible]枝家門の者へ中なるいかくみとて更
て拵付るべき牛やを日出のことせーおい
爰ぶんを補ひちん足上のゆ大切に勤むべきなるべ[illegible]
敷へる今九郎兵衛ぶ世なりても門内の者どもそ乃
家法をちりぬ枝九郎兵衛ねはの内よりつ〳〵く
父母の事に慈ぜり親配後にゆりても親の源居地

る武石七斗だりう色を家ひに用ひど乗くよく足
合せて雑俵なる牛ゆるどにぐ〳〵又物姫なるどの雑俵
をい牛〳〵ひ合せく合力せり元牛のを上に者ひ
者の所能とろかり給る門内のを配屋きぐ〳〵
〳〵屋屋へ中出〳〵ゆも色古人義田と乗く親
屬をめぐ〳〵倒りも晴にるひぬべきりやさて今へ
むに上にりぬ〳〵ど十一家者みの乗習次乃患ひ
緩愛石世能よ物ひ〳〵上り持く乃洞報の患ひ
あ〳〵ませ弱ひ歩を日に繰ぐ頼ひせ移ひ〳〵み武
九郎兵衛門内にて雑俵の者〳〵ゆ屋武組勝兵

清細工おりくとひとしきりの敷ひを配分せられの九郎
兵清兵屋とまうす出て曰門内の者ども此度の雑俵
上ようの御意にて以前仕せやべきとも兵紙義
分を外一門や合せ勝成仕ひて外抱や度ひこの門内御
別当の分をうけ当村雑俵の面くへ御まり加へきこし
ひやうにと改やれ其次九郎兵清七十歳だうかりうが
ぐうつうと原く入蔵の根菖の根ゑど掘へ孔子孫
折より御老人の者ひつ斗のゆうひべきかく因毎ま
ひとうとうかいやひはこう毎うれ骨れつてひとひ思は五南
いなされひとと度くこあ名れいよくぞやぬまひて山

[illegible]
出てゝ[illegible]ける毎に亜石なるものを入れ[illegible]
出でゝ[illegible]枝の[illegible]びうろ孫を老人夫婦の食とし其
間に枝打柴をもて親戚一門の雑炊をもとゝひを外村
中の小百姓の暫[illegible]やる者ども[illegible]度と紙[illegible]
[illegible]の[illegible]居の[illegible]先年御上[illegible]す志
の御上来[illegible]日[illegible]若[illegible]屋清兵衛勝[illegible]
きゝ勢[illegible]たの[illegible]と[illegible]九郎兵衛と
[illegible]人数に加[illegible]て助成せう
九郎兵衛門内十三[illegible]人数又十二人の者一[illegible]

[illegible]及び他の人[illegible]九郎兵衛が
[illegible]と倹[illegible]農業[illegible]
[illegible]て食[illegible]
[illegible]及び[illegible]
後年[illegible]を[illegible]老[illegible]
[illegible]
[illegible]の田の苗[illegible]
年貢諸役御[illegible]
[illegible]雨[illegible]
拾晩[illegible]

望固なりしかども母の委くことを達し甚く感じ涙を
落し儀ありてこだく湯りぬ

麻生村組頭市郎左衛門

此者の親の代より限餘業へありてよく養ひ親餘情
者にて出て親孝を外出入る者多うり人来ることに
なりてこれてで日と抑く
出ろ此市郎左衛門(不孝)を渡しぬる形にありてい
世義悪く是迄困窮の身をそ
ちりしろ此市郎左衛門譲りを受く後我身の倹
約甚ぐ守りよろしく暮せ親の為に遠ぎん

ゆを欲せ〜左親の去ることを聞いて酒うそりて
ゆ心を用ひくりそしたりぬ奥家い心を事繁ることを
ひたしと志を奪ひ親の妃若勢静なる事なり
第心を用ひくつ人ぬ七年家親財物出来甚大事
なりしゆば費用を顧び出生活加ぬ内外の治療なる
不ことなりしゆど絶みるないで死にる生後母ようつる
ゆまたく親切なり板市郎左衛門之家教多あり
ぬる中一人甚不孝なる者ありて悪むこと
とむゆるく孫んごろに教へいまゆるが今程い心を人
改りぬとうやとべく親孝中むまじく其後組頭な

なりて村内の五あまりの武い兄弟の服なりしぶるもの
ふい公屋ひがる着まで多く人がうもよくなりぬと
見えて上に達し寝員として来給りぬ

芸国村徳兵衛親愛のうす

徳兵衛拾ふる烟草石武斗の小武なり生得情ふうと着
なりしが此着の小姑婦人の裏所なりて見るに八助と
いふ者の妻なりて夫もあり人色にて毎く夫に別を勿久
の烟草なりしが打うち出なりて人あひく椀皿ものの
拾まで焼もく今ふるもの飢にも及ぶべき色をは
徳兵衛つよ逆小なりけるどうとうと三人の者へ我一飯

とゞけなへ甲斐〳〵敷抱しるもも雑後なく生立
今になほとむる母うにたりぬ又居村と接七とつ人者
あり温りて家根より強いつて右のうとおり稼穡
の業はとむるの能いでやむるなく本屋院とつる山
伏の父るとあり忠孝と名代改勧進母と母の仏と
あこれる日とそ送りるかく色うちに成の二月太学
ゞ安痛く乱しく乱いで不仁なる子の色さい飯炊く
るもなりかゞくいて不侵なり色を此徳兵衛見て何
のゆうりうるもあるかゞうまゞ二七日もるゞる内すり
我りと人引出色の小屋うけを紙と書い衣類の芸

ぬきとる徳兵衛妻そとたをけ墨きゑ月の事まげき
うちに洗ひをぎ縫綴りて肩をとうゝさをぬぬく小姑
ゝ恥ずゝあんとの世話出来ぬる所心いやゝけにこゝた
るひゞてを男子二人色をなに出ゝ深切こ
もゝと抱せう世の流る小舟に苅のゝを色という乃徳
兵衛がたゝ人なる色さしどゝ鄙の抱欲の損ゝく兵衛孝
の波間をもとぎる御殿面の水門へ分て孝ゝく赤進も
るうゝ色ゝ一歩朋友へたの色きのゝなゝしゞ月およのを
農業怠ゝる良民るれが色又儀ゝを揚りて稼ゝ
孫ゝを有難き

市川村養子徒決会清

は者いと小石姓なれて人み雇われ煙草を毎月を送りむ
ひとりがそれいとく離れ母一人をしなる貧きをなるこ
よくとこと一家妻りくあよとをわれども妻みく
も母の仏抱ひうるんとて今にひとり住しなる年
をもでに又十二歳なり朝毎に二三抵の老母の飯炊き
其餘の食物をもとくの人並に日傭を出先方にて多
くなりし食物をい必ど拾ひ集めの飯遅き朝
も麦の粉などを信夫け家に帰り茶と煎母と共に
そのくひせり朝ふ一い栗柿などの菓とやげる

し旦毎生得酒家を嗜みる魚紙を心を用ひ
又三日に一度必ず若川より約束なるとつる多の同僚
稀でうれ酒を賞これをもめく恢べしめ紙中
親切なり色い老人の飽安く飽安きに気をはけ
豆乃宮といくひもなく疲ずに記て必食ものとなさ
しむ毎をして我庸うて邪正あてやらこれい
ばくを見をなくむるのたぐひい老ものなりとる老
母ひくまで養ふは八十七歳にてやまひもなく
一すと終まる始末を之をよとて実へを養状を感称し
儀なそこなく終りぬ

貧に村巷の武助夫婦

山背之親を云郎云湯とつて今年八十三歳なりる武助そにつくく養之成間ゝ年きゑ孝行教を傳どうくるもみぞうくざるふよりご蒲団源長五へ養よ背貧之宝也一日も爾也妻婦一めゑ嫁なりしもるのなづくしも多くるゆ也彼ゞ妻もやとしく老に仕へ他物初ゆて出来ぬるとばこうれものをびやうくうにくく養くくのくく必まづこれをもくくゆ後ちう孫い已くくゆ也支婦の中に男ゆ人生せくとゆふまご〻けるりしゞ産の柿よく熟せくとゆ家つくゞ見

中にも和うらんと思ふを名ゝ元をまゝ祖父六
郎兵衛がりと〻拵糸りて奉りうるゝ外へも
及びを不の不参なる者の心底改りぬるも色とゝ
六郎兵衛親己来よを致し農業よゝ勤め租税こ
どゝとるゆかゝ同村の者りもむ間色色とゝや
六郎兵衛八十宵餘をたゝ〻武助夫婦の者言
をうけ剃へまゝ行うゝ武助夫婦へ御褒美とゝ毎
儀ゝ給りうるゝ私ん家加みうるひる者ゝと
皆人称〻る

河之内村源八夫婦孝子和歌

此源八ゝ者右衛門とゝ百姓の聟者ゝ者右衛門ゝ
男子なゝて十又年ゝ若彼をむゝ母ゝ娘ゝ子ゝ
里元より夫婦中ゝよゝ和ゝ者右衛門ゝ妻娘へよゝつ
ゝ妊ゝ後者右衛門ゝ妻娘ゝ狂乱の母ゝ出ゝ娘娘
ゝ男ゝをうゝ心乱色ゝいひるゝ〻ゝるゝ
ゝ彼ゝ〻ゝ俄たゝみゝゝ〻ゝ色源八ゝ
ゝ母ゝゝ〻ゝ甸〻ゝ元ゝゝ〻ゝ
ゝ乳ゝゝ源八ゝ抱ゝ〻ゝ色ゝ
ゝたゝ〻ゝ今ゝゝ十歳ゝゝ名ゝ
ゝゝ平生者右衛門山林雑場ゝ者ゝ

ゆゑ遅くれば百日もそく延引あの人つま
立ゆゑ源八又後より追ふて出るとせ打ちて書
文をもつて途中にむかひぬるべうくむかひ
夫婦人書文いまだ世話に浪さぐり」ゲ今い源居せだや
とこの武田本宅を譲りぬべきよ」語りくれば源八
夫婦はをそろくく家い狭くてたいぬりいへば
屋敷ことて御心静かるべまし伯父様くれば先へ
て御引もやめくく行き」と御堪忍いかるまでくやそま
ともい御雑煮よりく我く部屋へうつりていへうぶみ
ぬべきとつへば若右衛門もいまうだまぶ心ぶそうんも

とうひとうてとぶむる親切なそむきがくて行儀
して今日引とりもせざうる源八よくたくさく
年貢も滞らびるぐうみ未進ゆ」と和田大勢よ
て拙へも多くれど親乃部の家とび何ものそも叶へ
やうく書に心ようけくれ藝州宮島糸りのよ
きはき」ゆ」ゆ俄ゆ書文をもろくゆ書文日年
ぐろの祝ぐひみい行き」ど費用の多張ゆるるれば
糸るまじきといくれば家もあく日乗づひみ
乃愛ひ毎ゆ社あふ新母ゆ入金ゆる狼かしい
色をとうむけ実文居村袋口の庄屋ゆ中名月調

進じけるにぞ宮嶋へ参らせける程に伊勢へも一たび
参宮させまゐらせて京をも一廻り見物させ参らせ度
念願して母のかたへとかはずむしよきをも打つゞけて
其願成就せしとぞや下賤なる民の中にも義子の孝
としかく親の志を常になしおなきるをとて
是又よより孝子の帰りし之を称し給ひぬ

城下市中孝子招屋忠兵衛

是又孝行なる者にて孝養のひらくしき又はく
貧しく渡世にてまづしき寡婦の家なれど遂にあるかぎりへて
をひきつれひくり行くぬる様さらく甚ざや

さしく思はずの感ぜぬものはなしとぞや因幡乃孝
状孝子の様横ゆかりあるすぐれが遂に譲りて家に
贈せり縁る亦世一紹しても孝子の状態つひ居をを
みな是ぞ孟子のさまつれや徐行後長者謂之
弟堯舜之道孝弟而已矣と又説しては母に仕へ
しもまた深切なり姉は足腫乃妻なりしがこれへ
嫁ぎほしくとりん昼は家中の細工に出夜はあつ
まりはどへ入るりのありて夜とむふ母もとく寝ざるに
孝行始終一日のごとし是何ぞ孝心一心に人乃奥ゆ
まようし語きとよに遂し末縁りてく表彰し

たまへり

城下法志町若婦志乃

此女性実孝にして能く配偶に

つかへ忠右衛門つゝ者のかゝや居るに

仁助山畑を作り作り出ず備後に出て世とはれ

今は未婦ともに年老ぬるに副へ仁助近年病にて

筆硯のまゝにけり絶ぬまゝ年ばかりに和多の畑を耕

作し此女孝心深く仕へ人々にかわらず働ぎ

ら助成せり尤一日くゝと父母をそだてゝ養ふ

継父病つゝて積い実母よりも孝心をゝこびて

つゝ人ぬるゞ今いせんゝ乃山畑をもうり

て其日暮をせゞやとそへ仁助と後のうんぎを

思ひく見そゞ見れば此女の心にもをまうせざり

きいくてい孝ひもつゞきゝ見れば此女の孝ひもるく

に出切ものとりてうつきしに打くんまひて水るゞ

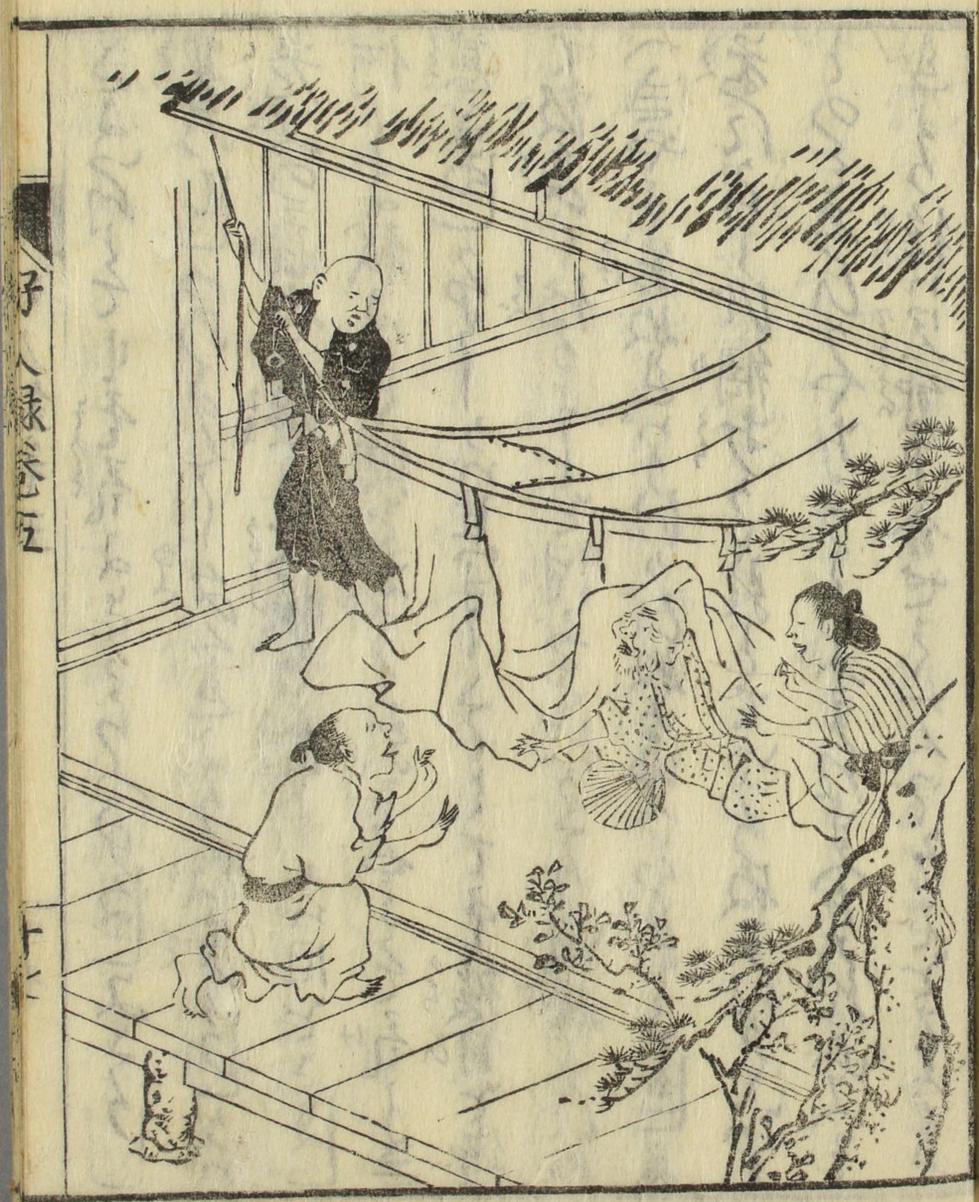
ゝて母の労を助けゝ見て継父腹びあまりに被ら

労状を人にも語り家へいる所で風聴せり此者

とに世へ婦人とひ孝に絶父へのつゝ表るれば一

生同家特に思ひ恩ゝ倦ゝ獨りゝ孫養ひたま

ひぬ



城中所者ゑ山伏ゑ書院先明院兄弟事

此両人の親を本学院と云ふ年九十三歳みなりは
ほ又年己来老耄てよろぼ心体なく老の僻ゑすと
いやましにくあるねものゝそゑ多うゑ」にゑ書院兄
弟兄と云ふ兄ゑ人とせんば兄弟毎日〳〵甚腹ゑ老
父武い飯ゑふけゝ記出何とそ夕飯遅きそ我をゞ
飢しぬゑるゞゝて腹ゑ〳〵ひのし」とゞく言ふ
ゑふ飯ゑ中ゑをゑてせんば兄弟とそゞゑ家内皆〳〵
ゑて記て食ゑゑるゞゝゑ機嫌ゑゑて往
よくゝゑゑぬゑゑの狂態歳飯ゑゑ限りゑゑ

きさつてもそれ乳のさらくうの色のさら
雲乃色じやうのもくしゃうのごとく数多うの色うば
老人の腹ぬる陰の数腹を蓄へうば用とさま
何〳〵我さく綱とおうく孔そやうて乳しき
甚ざ色うのもくうば其すくてを後日を種
て数多くはるようをはぶさにうの数腹うの数
べきやと告ぬるいうけうひぬるゆへ意とる色の
家にうくび綱打うく孔とていうぬうくなる
とのくもひうやちうつまれたゆへそ
色より後い見物中合せく一人づそだとそうる色

ど秋のもとへまで後もちがう数をあとちさうてま
つせうの生は家基を好くそうくの友達さし
ぬるが老て後いおるもうう紙乃見物老人
を顧ませんぬるうるぐおとになう後日とつへど
厭ふる色我弱人の弱のまれまへるうしがま
てうる社うるくのとうふまうちるくふをとん
せ〳〵乃とおく〳〵ぐよくなうをひまけ色のうち色乃
とて老人を顧めうるうれまぐのくまてそ蒙し
給うんとて多く萬苣ると狭き屋のうちに種て元
を掘しつく給りぬ色びあとに種屋てそと色

めらるゝれ心づくしまさ
まさを恭敬して紙ひねり
てゝ奏聞外へ出れば
出れば手書院ゆりて
出家恭敬一色ゝの
ざるゝ能中初徳ゝ
ぐろに勅ゆ奉者の
ぬるあれば冥慮
やはり渡るゆい
くい物のゞ好むゝ

人録巻五　十九

一度ゝ
たゞひ多くい
ゝゝ人の
ゝ東家の
ゞ習ひ
ゝ御感心
ゝ

撫摩座禅
延享二年乙丑三月
中引座

其方今以志為無講席世居之儀且信濃
切之儀奥之儀御德高特之儀被思召候
因之而御褒美来三俵宛下置申候
又於所云所者行稽玄湯を以上
此度又御褒美宛下置申候ゆえ
已来家相相続申付候所内大勝
うれと褒美給りし事帝ゆる稽玄湯
去度まぐるを下さるかしや住居のうきを
して家相相続の者さしよ
御系勅御陶冶の打うちまぐさ川原御通

まで御送り遣ひ出ねるうまことにうまき
ゆ雑さまれとうるとけん

浦

厩下人玄湯妻つま

被玄湯を後又後悪再後して不相なるう
あり上うば後又相相続なるれ御奴多の居不を
し様ぜらし行方方ふ上びなりにうふまれると
又又年万陸上百ゆと擲て玄湯う行来を
男ゆ人諸日玄湯今八汝ゆるし申れぬ

云へる上聲に彰れば はまとりしめく若きをとて
心なく従つさるはしてひされハあれ色を正して
助る人あいふれ我孫が為なり一たびあうをや
鼻孫求めまぬ換をみんとふけ待つが死ぬるとも
憾はしとていやはしれ心をぞ定じる月日を経て
君のあわりしに新婦のすいりてよりそらでに
て飢渇に及ひぬべき体なりしが甚だげさ為か
孫を聘くるの外志を白く絶にあれが微實る
より孫が居所のいましめし敕され御領す乃
きこゆる人ゆりてあれがかへのだてくろともに

日をぞ送りけるとなん

上灘漁師長左衛門

延享三寅の年 公儀御巡見三使此地にきたり
給ひし時上灘を通らせ給ふにより御驚く乃
あまりの浦にて網ひかせまいらすべしとて漁師三人
付られけるの長左衛門も其三人の一人に撰ばれ
巡見使来らせ給ひ駕をとどめるがら給ひしかば三
人の漁師網をれ引つき多いや魚をして引上しに
彼長左衛門儀誤りや信及腕鬼とくも思ふ
すべてよとぞふ漁の感ぜしまや二人の網より魚かかりし

彼が網の〻甚多のうを巡檢役見張ひめづ〻しをも
無せさせ給ひる間いを長く給らぬ彼が網にも
魚ゆくいとゝ多く来らせ〻せんもなく彼人も始めるる
ゆゝしみよきまゝあひて御巡見も行ひく奈地
とさせ折出給ひ〻ゝ名をゝ〻御乃もゝ乃の居屋
などにうへとく彼が網の魚無せさせ給ひ〻ゝ
長尤傳門が年寄家内大勢は居〻て年月もいまに
うを〻と始め川表の信受まく上を弱よ公の源きうをゝ
あげ稼く完年上より寵愛給ひ事を〻御
物語りや〻せうべ御巡檢の三役つゞき〻御の外感ど

孫ひねくりや彩る事うやかく漁舟をもとをいかが
下のうらにもる氏姫　き世濃うなしとこひ恋邪を
系末舟屋きの系にして豚魚を利法大川利
貞とつくるにもるひ伝るなるど　枕草伝を記世
中の年よりもとし　母の年まで十二年るしいで
孫ゑもいやはしなるふ程つ母ゑ　にもいきづく
善しなるよ　他人安伝る

教訓
徐年　宝好人録巻之五終

教示

親をゑを愛しまるまく親を大切な
　君いやはなる及びをべく吾より上
うは人をいうやまひとうもべし夫
婦いるれ安きも乃なる差別の立は
やうにいうはなし兄を身を縁を身
を兄う吸ひをべく己より年ゑける
人をば丁寧をたくし疎ゑをべうは
友達乃間治なく信をなて交るなし

想じ奉何ゝみまゝにたゝん利潤あり
ゝゝ人のゝあなしきゆゑなるゝを
只〳〵母の志〳〵が職分を守て家業
專一ゝ心ゝゝあるゝば自然と天道ゝ
叶ゝゝゝゝゝゝ衆利ゝゝゝべし

御代人恩序

堯の時ふゝゝて一老人ありて壤を擊て
曰鑿井而飲耕田而食帝力於我何哉
られ堯王此徳を聞給ひ舜を召て中
ふたゝまを立ゝゝ老人を和ぐるいたゝ
水堯のゝゝと云てゝゝゝゝ民
なゝゝゝ今や三王代ゝゝ御徳紀
八洞ゝゝて流ゝの事ゝを忘ゝゝ

衣食住の三ツハ。結構と云し。其度々後の
稼くまで。仰ぎ奉る。大安楽
と得世しめ給ふ。御治世。仰も中く学ら
なるべし。それが為氏。泰平にして。度々
治世の。御高恵を。皆我が利に
成明らく。活身をとらんことを。
く。天下泰平に。御恵なることを。
奉れかさのごとつて農工商乃角合弦

まをいつも月末と云て酒屋
あるを米の俵ハくるけのまれと見て。郷
をかりめ大安楽れ男のこと不者しく。
青漢にあらざるバ。食やうハれとうば。
交術にならざれば。商ひ中にそなる。首が
うへ。不是たらく。朝ら晩までとあ
きうくしたことを。天道きく出ら
ずく。四年とうへ。見たれ。待矣あると。忘を

けくしてぞんがあるべうらべ。をそを行ものとの
御異見あるとて。御しるを幸いとがりかし。
我うめをもとふ給ふ給ふをもとべきと。奥方の
御仁政よりうく。孤有を多くれ御食屬成
ものうをたまひ。かうして大雑と先ものと。
幸をしるものなり。かるる恵給ふあることと。
人ものへのをふ給ふ。皆親ふれ給ふ幸し
なりと。ものおそをしるべきをありをを

ぞを度をの御美見ふ。ふしい米の飯の有
がさいとが。骨ふをたりとをえて。ものを
殺畏の心生せしやうもよさいをひ
ふあらずや。此世高びかり。天の冥恵
にをかなりべし。今この的ふ物ぞを。有
べきべ。この沢書騨行系。食事ふ畏れ小稀
と故く。手に玉人。其書ふ受食の高恵と
のべ又本国と并して天地国を御ふ高恵

ちの下に鉦山職の幸者にまれて出る所の
恩とあらんか。平つくくこれを弾ぜるか。
丁寧深切。尤世に無あるべき書なりとも
らくに。章中漢文とまじへて。常記のごと
中とかゝるとこと。こまにうけく拙とつゝ。
ことぐく俗字成張し。たゞ仮字と加へ。
旦ぜうある言と消して。かゝる稿本刷成ふ
命じ。世に公にんとこれをうけ熟読し。

世ふ公にくく世ことうざる時に。鏡職のうまれ
所のごとく所の福とうくべし。徒に鏡職の恩
とまりうざるのみならんや。既と俗の恩と祈
へる。孫長久の計も。まことに外なしと。
俗に幸書ふ以て五代御恩と称ること有り。
こゝの御恩と称ゝ。
たゞ先つ世に鏡職ぐくたのゝ
くすかゝ。くくに幕年の御代の御恩

たりと。名をたぐらもちろびのはまりに。
書と名づけて。御代の恵とあらたの歌し
とべうな。

天明丁未冬十月朔旦　中井解亭述

無ければ天地御代の清めぐみ
父母や主人の恩を味ひ人
農業業を怠ふいたるまで
ちり山海の汗と成りへば
食ふ飽き月日さいとひと好びて
ちふふくらむ人数あらまし
此三首の歌と無尽の書立ち人ハ存ふ名ら毎さ
おく仏亦く食時毎ふ唱へべし。これ食時五恩最際要あり

食時五恩

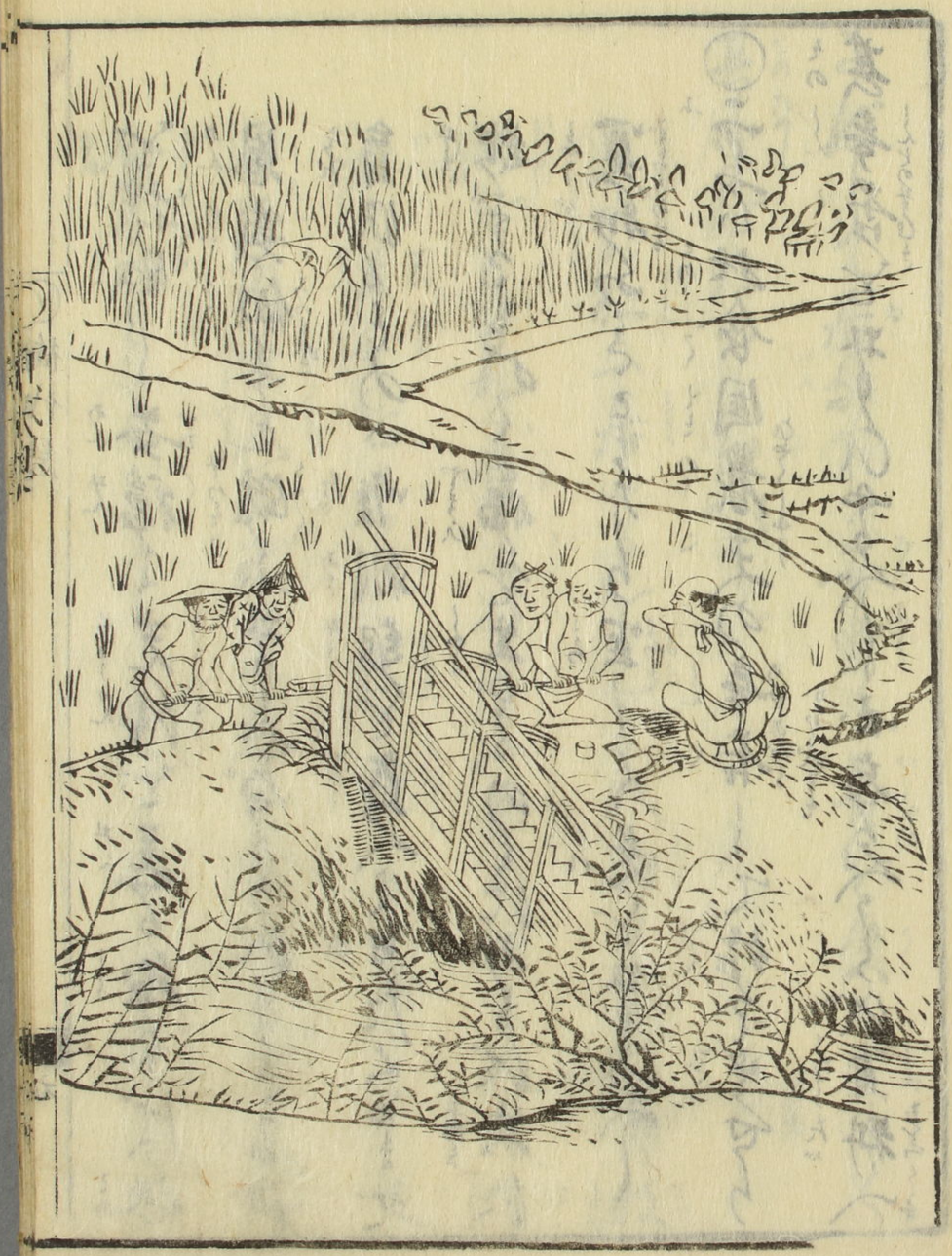
凡僧尼の業ハ。食時毎ふ五観十仏名を唱
へ。此法ふ食べし。法ふ信敬を発して。法ふ
食ふ事なりと。存ふ心ハ此色なりと思へ。たまこと
釋氏ふ准じて。五恩を知べし。恩へハ天ふ成
始めなり。三宮九卿までも。食時の作法あり。
受食の上分を。宇賀乃御魂ふ捧ふなり。

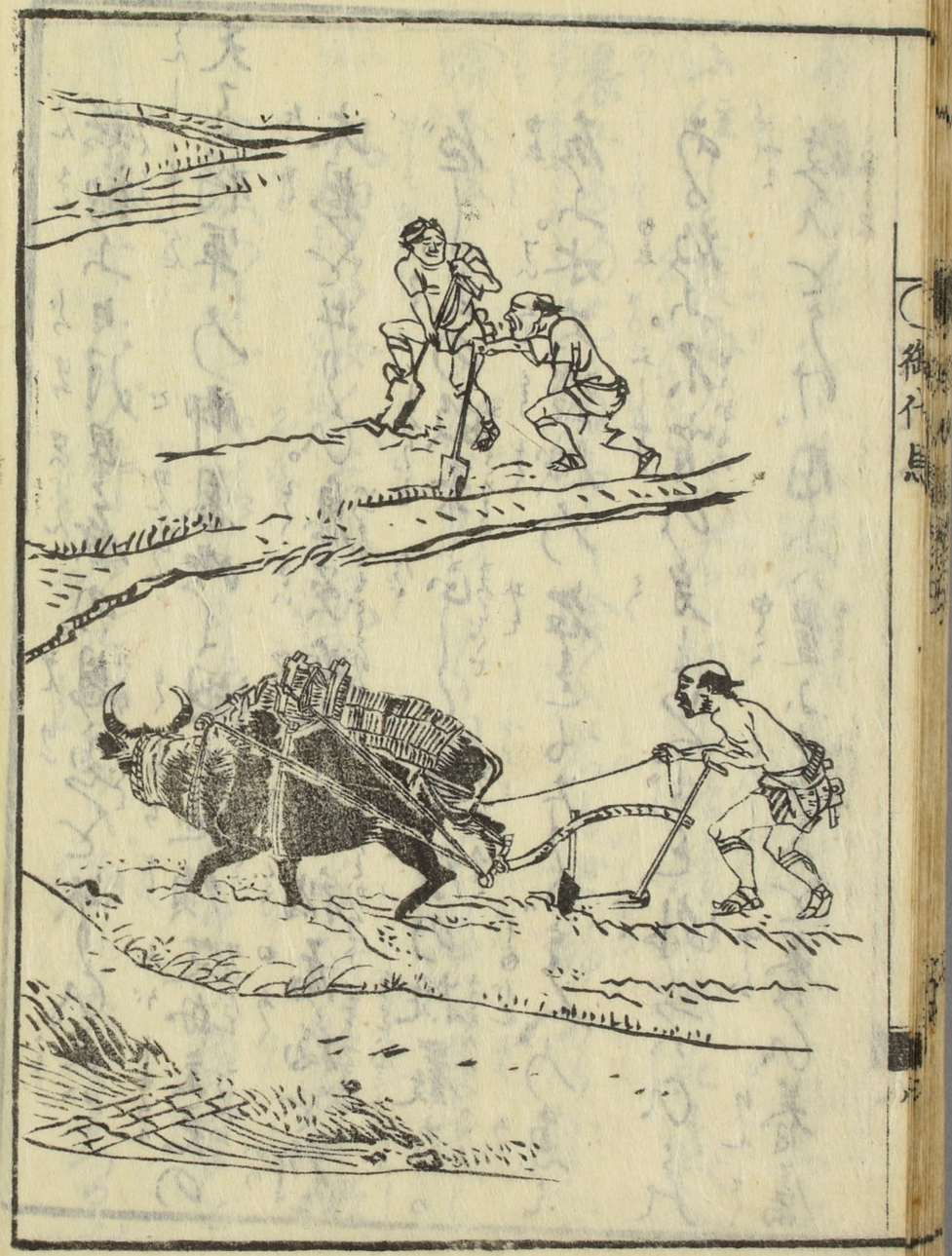
是五穀の種子なればかり。新氏乃出生飯よ
ほくより。微合ひつくといへども。人倫ある者なんぞ
貪欲の心く。貪り嗜んや。禮記曰。夫禮之初。
始飲食。又曰。毋搏飯。毋放飯。毋流歠。毋咤食。
毋啮骨。毋反魚肉。毋投與狗骨。毋固獲。毋
盲目曰。飽食暖衣逸居而無教則近於禽獸。
此誠ゆゑ深くおもへべし故ふ今古人の教く給ふ。

新氏の立親ふなぞらへて。去りて変化のごとし。
○一方此食の業所をよりべし。先如ふ
しては父母の養を受け。歳長じては君ふ
れて。是と共にしてうべし。或は交友な
らんして。男女親属ふ他人の養を受ける事
あり。其恩恵ましまべし。世ふ暴虐の人あるて。
衣服金銀なしで。唯やしなひとうくる人恵ふ

あらんと思へつゝ。長遐てう。高く渡ひべし。けふひ
ふ伝して渡梅たるゝ若ハ。終ふ略倩ふ鐵丸とべし。
墨之高乃己が力ふく。嗜く若も世静ふうぶまべ。
嗜ふ業ふおくべ。ろ〳〵〳〵国会の恩と思ふべし。
凡男子女人若ふ。風ふ起ゝ乎と渡ひに嘶。
胡蝶いまゞ出ふる時。まゞ東ふ向ひ乎と
合世十たび佛名と唱へく。祈ーたくまつる。

懇勤ふ日月早度の。恩徳と并りひ。よハ
天子将軍乃御恩。次ゝ国主地頭父母主君の
大恩と并りひ。恩冥延命轉禍福と祈
ゞし。上の政事に心ゝ。身渡の捉嚴なる
ふ水火盗賊乃苦もたくさん乃恵を
ある故ふ。不肖の身と雖。外ふひとれ
設ひとうけ。内ふハ豊ふ善事と養ひ。養扈





と枝動し安穏に光陰を送る御ならば此
恩恵偏に忝し財ふ井りへ尽らべきまこと
有ばるものハ唯朝起と責へ日たくるまで
起ざるもれし病を生ずるのみにあらず大に
冥加をつきたり恒しく是と井りへべ
○二ツハ此食国農夫の辛苦して作る米穀
甚辛苦と井りしかるべし此存べらべ自粉へ

さべして居ものうち安楽に養と受く恒しく
甚楽とたのしべし。
夫士ハ仁に居ると元とし。独りふ武士ハ義
生とをとるを。常と行とふ。義ありやまれて。生
道に生命とをとりて。己が楽とし。強うして。
己の長久を求るハ。毒を啗ふ。やうひを
食うとをとるがごとし。不仁これより義しきハ

あるべきなり。人寿ある民の父母たる代地頭
領主の方ふるべし。ふしぎも新知百領ある
人の弟子民を撫育恵みと称し民の為
本末を知るべし。非理の民百姓を強
貪る事なきを去員寿年中に有馬の
代官伊系の下使非分の民をあやまし
生ずる寒地獄ふ墜せしと因果集に

出でたり。器なるべき事なり。唐の李紳が詩
に。鋤禾日当午汗滴禾下土誰知盤中飧
粒々皆辛苦せしと。又中将右村郷の
歌に。あぐらしき田もなし
ぐまの民ふ恵みて分ふ獄ふ強有りてで
せるり。一粒の食と汗を作る人の汗ふ
して喰ふ所ふ古人もいりりく

井をひとつのこと。

○三ノ段。我身奢穢行もあく。君と助け民く。

ひが。切をなく。此美食と受る事。事の忠しるべふ

あらじや。容易に歯もべらじ。

是まで食ふ。ぶ事とのこ思ひて此思合

こハ。牛馬の水草と食ぶるに異あらじ

○四ノ段。世ノ人我より貪しき人甚くし

糟糠の食をても。飽まぐ食ふ事紙ひあらじ

ハ飢て死る者を何ぞ。物ふ飽まで食ひ飢饑

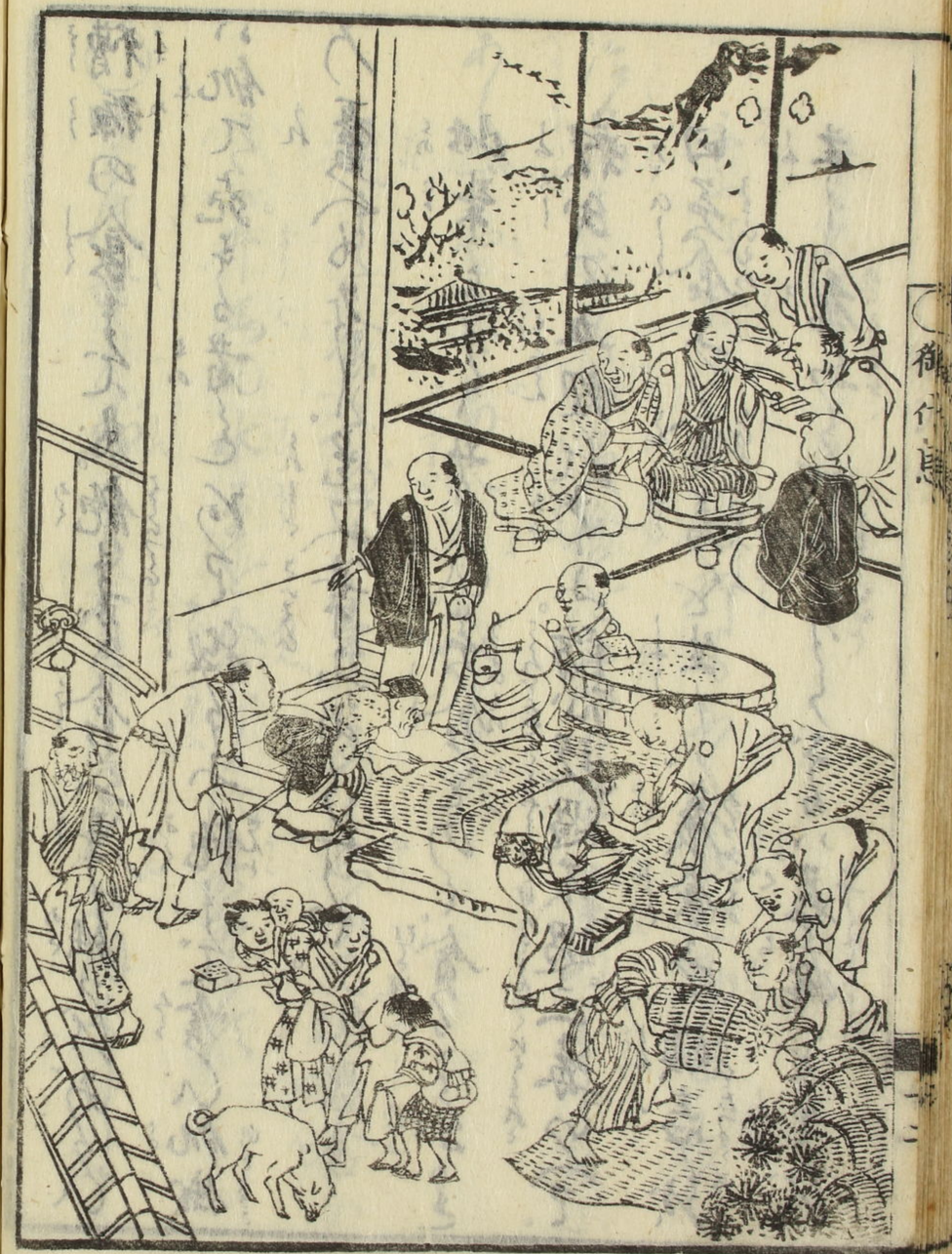
乃憂へもなし。是又事ふあらずや。

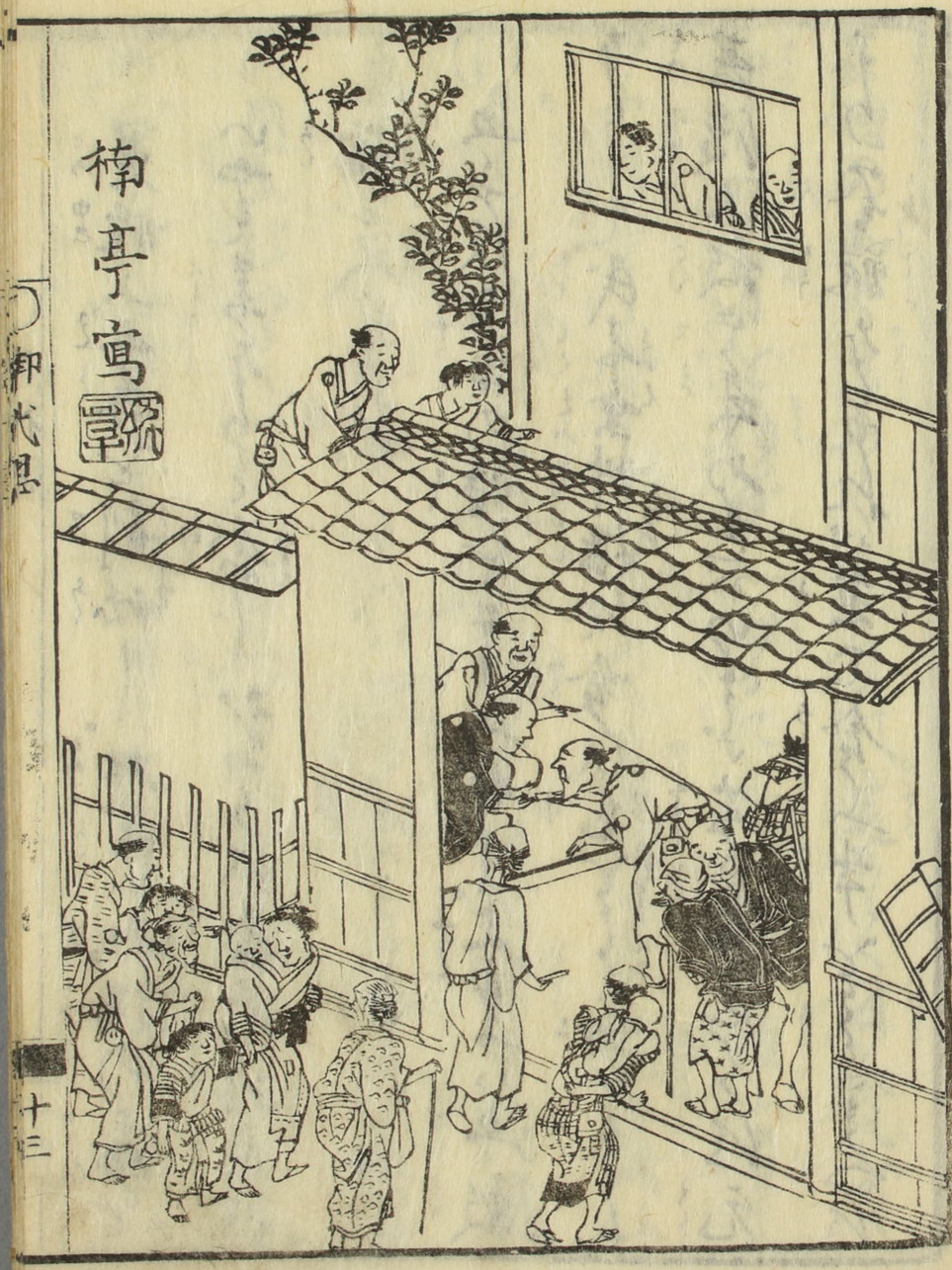
此事ふく世ひ。美食とのく貪るこふ

新氏の五欲に中ふ「防心現過不過」三毒いへ

回美食ふハ貪着と生し。農食ふハ瞋恚と

生し。毒ふらぶ美ひらぶハ。是癡と生じ




楠亭寫

是故に三毒と御仕し。此食は飢渇の病と
いひて第一なりと念じ。かるべ食の好悪
論じべからず。

○上古の時と雖も上古は立穀
なくして民本業叶根食嗜毛血とする。
其後立穀を集めもぢ先食をもるべ。元
より茶瓶なれば煮て食ふ事とぞきまりし。

其時の如く生にて食ふ。是もろく味ひもなく。
都て腸胃を損ぜん。然るに今日飯と頼ふ煮て。
叶ふ限り食し。又蔬あり羹なりて朝夕嗜ふ
て足を足。其上酒者なりて。叶と楽まし。先
氣與と国をとや。されば朝夕食とる毎に五思
の内に於て一ツなりとも。手に井をし
めざして。毒をされば。日々に楽を事にあり。

又大に百和のうべし。

抑神ふ上古ハ血氏新方ことなし。史記三皇本紀ニ。

古人ハ血とともに居て。禽獸毛と居て。穴に

栖。後ふ神農氏帝氏より以来始て

火食をといへり。

凡男ハ生まれて。六十歳ニいたれば。立思後

ふ関せずして。人の性ハ長

ずりといへども。幼少の時とへざる所ふ。蚤ノ

教生と好て脂ふひかれ。毎に。食の好き悪き

を言ひ。日々に日まぐる狂病。終ふ病と癒ず。

是蚤ふ溺まれて。其驅とまれて。道のたてる

法とする事先ずさノ過ちなり。孫子人

寿命延長と。潜んと。世ノ人と共ニ。此ノ思と金ず。

勿諸ふする事ずりまで。此ノ思と金ず。

天明未乃ゝ

賀陽山攬克誌

附録

凡此世ふ生れて一紙をも弘行位置所みつゝ
ゝぶゝくも養年の御代乃御高恵とかゝ
ぶるいとなし。それ綱領本書にいるがごゝ
とくゝハ業紙の乃ぶ所にあらゞ。これ幷
て紀恵をべし。かゝる大恩をとゝけゝぶゝ。すとしを
報ずる甘りひハなくして只いとづゝみ玉のゝ幾
思ひゝゝゝパくゝるものゝあゝゝゝハあゝゝじ。

孟春之月 類条矣。春秋之月 類条鮭とあるべし
類ハ毛中魚とかりて。食物なり。身と養ふ所。それ
思ひと共りして。河伯と書。又鮭ハ魚ふ鮭とかく。
食して食とかきあり。そのかぐこそ
山王と奠といふ人にして。びすなくして。
せうくしいそさて少と設め奉る。御代の御高恩
と鮭をべさきあり。御食と抽物骨碎身して。
鮭ぎるとそんとあるまじけとどくせうくは

万分の一なりも鮭ぎるとあるべそれ物の鮭術
といふをめありさてそれを鮭母と共りで先と乃
食時立思と熟後して少ふ海く思ひつそれぞる
中にをべしそのくへそれ立思と海ふをべし海ふ
もるとは我ぐ身れ乃ぶけ行ふこと方り第一天地
国云御上の御高恩と思ひく鮭をべし立ちれ身と
してこの御高恩鮭ぎるといふこと八及ぶべきこと方ら
ねど御上と御を尊ひて御位と寄り我身と御

合浪と顧くゝ心も怠惰ならずく且農ハ耕作ハ必ず
そしてみこゝろ穀ものくも金年を作りむし所年
貢に未進なきやうにと心がけ農家ハ天地陰陽乃
恵を得ると云ふ役目ということを考へ又立て稼ぐ業を
する所と大前ふつゝあいこゝろみるも世事のたゝを
忘れて神仏にもあらせ無あるこれと作ることもほど
ハ天下の為と作ることを役目なきバ一ぢゝくも世事ハ
ちゝ変と如何ほど又商ひ賣買ふつゝ安程を

いこゝに形ちの高利と貪ることを無なる物と考
りゝ申ゝ上我儀多くけ人いつゝこゝしても
ゝくゝ申ゝいつゝ申ゝ外なる雅義と申ゝ高ハ世事ハ
変ると為ゝる役目といつゝこゝと者ゝ亜聖一切
の物乃師範ゝくいづゝもその名を明らかて
世事ハ変ゝ如べゝこゝと者ゝ仏も来ゝのゝ
とゝこゝ亜ハ天下泰平五穀成就の祈と申ゝこゝ
聖ハ人の病苦と救んこゝとのゝ心を一切の

他の師に已とぶらくくしく人と教へてう汝ぞ心ゆくひさ
ゆくしてまたくに進ひ申りにて学まとめぐらまべし学
もろ的八月ろ師上の師高恩と万らの一じかりも報ずる
ふ今べきをひらちに天地四方大恩と報ずるを
もとりべし切人君父の恩と報ずべきを句編人父ふ
あらぐまび生ぜば考ふけらぐまば長生べとのたまひて
今日まで今と今うすること考父母の恩をにあらべと
いふことかし勉力と恥しして忠孝と励ひべし

又子や臣ふ恩をまでも今く恩ふまに報ぜ
仁慈とふくまもし恵ひべし沙夫婦兄弟生に恩を
ずして大前にまどりべしして朋友ふうちに世常
ふあるの同学人とぐくこそこの恩高大ふ
て書とと浩るこも学べうべたまひいふる事知ある
人といふこも先自己耕事と斗自耕し自給し食も
物使ふもあるこ酒と造ふと味噌も仕漬こ塩と汲
炭も薪も撰鍋釜掃物子も自作こその外

百工のことも何も角もむかしよりしてなれへるやうなる其
職人ありて農は五穀野菜を作りもし工商は万物の
物を作り商ひ仕かけて何もかも不自由なく日用
の調ふことくく此人々のおかげにして今安逸にして
喰ひ一飯いつくいふ人の汗あぶらによりて出来しぞ
其人をおもへば塩噌野菜魚鳥にいたるまで其品の
人の辛苦によりていづるものなればその人をおもはゞ
始めは世界の中のたれがしの恩のうへをもしらずは

すべての人はまじはりにおいて恩をしらずしてみな
て無理非道の行ひおほき中にせば自然として恩忘
報をなすべしさて又世界におゐて方角東西と
そなへて一つとして益なきはなしとも物の品
たとへばたまたま出現したるものと思ひて菓子一枚
紙切一枚までも無益に費し捨る事ともに大切に見るべし
かくいはゞ衣食をほどこすもするものなる助け
おほくとりあつめ一人の腕としての余年久しくば余光

乃癖がつくるおく喰べかさ癖がつくるものをれば餘さ
堀悪くて如まじけを腸ハ生ぶ中ハ生べし世間くらい
人ぐ二種ハ多くたらバ殺るて穢世界ハたすけ為べし
これとハ多く鐵人元食ふとあるハ我ごゝさ貪婪のこゝも
ぬけ元殺さるべし殺ハ我兄の保養れたるれかく
して真鳥の命と云ふ為じゝさ業ありこれを
業喰ハ定りさる料理ハどれつくれバなるべこゝは
安穏こゝれバ是悪なるこゝ多ハ生ぶ命と云て

まぶ雲とするこゝ氏不仁の取り多り真鳥の類ハ
命と捨く殺と恵こゝ為ふと生りひこれと生こゝ為
殺ハ用べるこゝ熟世の中にあるこゝ多く殺生と
捨くこゝる為ハ為こゝ氏見ハなひこゝもれハ一生なし
大殺ハ不淫の業てあくこゝの稼ぐこゝの方生ど
大小便ハ蠱の極ふ殺く五穀非業と養ひたつるこ
とのこゝ為こゝ恵こゝ殺ぶバ大小殺の業と思ひふバ殺的ハ蠱
こゝの人てこゝるに小こゝハいこゝ生ぶこゝ行こゝ時ハこゝが脚

あらこそ云べくとえらびて撰之甚不云者両度之とあれば
云行ある人ハ我法則とする人たまハ大恩あることを勿論
又罪と犯して刑せらるゝ悪人ハ天下ハ落んあまでこれも
我身と顧ゝ思ふと改るたらふかく身と亡しいのちを
考ふゝ此毛罪と犯せ〻ば刑ふあふぞと考ふくと
甘へ〻これも又善あるまれバこそ世界にあるを拾ふ
一口して善あるこゝのハ善こゝといふことを以心をだし
孝子と孝子ハ親敬白仁民白愛拾とのたまふこの

心ハ親といふハ我親や兄弟を初めとして尊卑
といふなり民とハ一切の人といふ拾ふ倉敷者ハ其外
一切の物といふなり仁とハ慈悲引くべく人のうへと恩
ゆりて行くことあり天地や兄弟をはじめ
心と甘て一切の人と仁と心と行ふ
一切の物と愛をべくとのたまふ拾ハ倉時の
五品と撰充バ雲人の居れ一端ハ金ひりう五倫の
交ゝも四ふ為ゝ世上安堂ハ流家と為べく

又ある老人の活山に須ハ金平に米がこぼれとする所と
なりて過くる山飯と拾ふる所をあつめかりてこれを
うべしして餓鬼あるべし貪欲のいひ偽人ハ遠平に食物と
拾ふ中にあり時ハ大凶年をしと飢うゑ物に
食をなり見て物ごとに山山如くこれ物くを雲ぶ集て
大ふ不自中ふ如このなり先新と法山にひして不審
の術ひがかなきハ父母大悪大悪の心あまりて絶ふ
動商とうけ餓鬼ふあひて手物万悔ふるを如ひ如ふ

飢となるべし又人が法山ふ如てまふ春り不審ハ
ふるまひとするとこハ服なぐこと主人の服ふあまり怠
異ふとつく主人飢餓ふあひ一生中宇に遠ひくこれ
あし兄婦が法山ふ如く不見ひとること兄
婦ふ見こふ兄貪餓鬼ふあひて流浪の服となり
こつるあり又婦として夫が法山ふ如こハ怠こと
きて変餓鬼ふあひくこひちうふ如うもまこと又
世間のくと法山ふ井りて養稼ふするこハ人ふ

うと雖も朋友知己錢帛あるべくたくずむ
ものなくば必ずあるべし城山天の与へる錢帛は御上乃
御仁恵又は同朋の助合うて御恢復あるべしから
又偏の交つたがひ不行海とかくれしより世界れ
廢人とあらうは知立の錢帛の墓へ
とまるべうべ名まてもなほ名ゞくてしてもあ
はしべし

手島先生教訓書目次

やしなひ州　全二冊
同　二編　全二冊
かなめ州　全二冊
同　乃あらう　全二冊
為のもと号　全二冊
賣ト生業安楽伝授　全三冊
開運出世伝授　全二冊
長命不死伝授　全二冊
若返ふなる伝授　全二冊
徳のなる木の伝授　全二冊
御代の恵澤　全五冊
勧善見世えや　全二冊
楽山子州　全二冊
民の繁業　全五冊
夜話荘子　全二冊
勧善小語　全二冊
又教安楽義　全二冊
かるかる伝授　全二冊
福相不死伝授　全二冊
和合長久の伝授　全二冊

日用心得帖	全二冊	安象問弁 全一冊
立身治家訓	全二冊	御代の恵 全一冊
接育帖	全二冊	鶏鶴問答 全一冊

教訓書つゝみ帖

物編十冊
二編十冊
三編十冊
四編十冊
五編十冊

右すべて教訓の書類を尽く集め大成なるべきものを拾ひ後編せんかのづくゝ仁義の道ふかくうて倩考補成なるべくぞ

丹堂遺稿	全一冊	寺子大学教訓鑑 全一冊
鬼は外	全一冊	
左傳随筆	全一冊	
福神教訓袋	全五冊	

教訓物書物類刊行本所

京都書林 三條通御幸町角 吉野屋仁兵衛板

和漢西洋書籍
文部省御藏版翻刻書 仕入賣捌處
學校用書籍類

下京第五區鞨慶石町
三條通御幸町西入五十六番地
津逮堂 大谷仁兵衛